

(B) 活動・研究助成金 報告論文

Edith Wharton, *Summer* における 主人公 Charity Royall の家族形成と主体性発揮

及川 英

Key Words アメリカ文学、ジェンダー／フェミニズム批評、養子縁組、女性表象

はじめに

本稿は、イーディス・ウォートン (Edith Wharton) の『夏』(*Summer*, 1917) に描かれる「養子縁組」と「結婚」という家族形成の営みを中心にジェンダー／フェミニズム理論の見地から分析することで、この作家の女性主人公の表象を主体性発揮という点から再評価することを試みるものである。この小説は、主人公チャリティ・ロイヤル (Charity Royall) のロマンスの失敗と養父との結婚を描いている。ニューイングランドの小さな村ノース・ドーマー (North Dormer) に住む法律家ロイヤル (Lawyer Royall) は、幼い主人公をマウンテン (the Mountain) という被差別地域から養子として引き取り養育してきた。17歳になったチャリティは、都会から来た男ルーシャス・ハーニー (Lucius Harney) と恋愛関係を結ぶが、彼は結局、妊娠した彼女を捨てて去ってしまう。ノース・ドーマーに残された主人公は、最終的に出産することを決意し、養父からの結婚の申し出を受け入れたのち、そこで暮らし続けることを選ぶ。

この結末に関しては、本作品の批評史において評価が永らく二分されてきた。養父との結婚とい

うプロットを家父長制のイデオロギーに照合するとき、結婚に際するヒロインの主体性の欠如に加え、養父が行使する父権の突出など、その否定性が強調される。例えばエリザベス・アモンズ (Elizabeth Ammons) は、主人公を「シングルマザーのままでいることも自分自身の進路を新しく始めることもできず、周りで最も権力のある白人男性と結婚することを強いられ」としていると指摘する (Ammons, 1995: 82)。つまり、この結末を彼女の主体性が家父長制に収奪されてしまうと解釈している。だが他方で、彼らの関係性に非家父長的な共存の在り方を見出す批評も存在する。なぜなら、彼女の生い立ちと地域の閉鎖性を考慮すれば、ロイヤルと結婚し、子を彼の養子として養育するという選択が、彼女にとっての生存戦略の一つとして読めるからである。シンシア・グリフィン・ウルフ (Cynthia Griffin Wolff) は、主人公の「実現可能な幸福」でもあるこの結末を、「逆説的で不完全」とは認めつつも、評価できる選択として読んでいる (Wolff, 1987: 232)。さらにキャロル・ワーショウヴン (Carol Wershoven) は、この結婚を、互いの弱さの相互受容に基づいた「ラディカルで新種の結びつき」とする (Wershoven, 1986: 122)。つまり、非家父長的な「共存」の意

義を見出しているのだ。

本論は、ワーショウヴンが指摘するように、主人公とロイヤルの家族形成に父権への回収以外の意味を見出すことを目的とする。さらに、主人公がこの結婚によって獲得する家族的共同体が、所謂、近代家族像から逸脱していることの意義を概念化し、この共同体形成の営みを女性主人公の主体的行為の初動として評価することを狙いとする。

1. チャリティの出自 ——ノース・ドーマーとマウンテン

本作の主人公、チャリティ・ロイヤルというキャラクターを検証するうえで最も重要なのは、彼女が養子である点だろう。彼女の結婚と出産という決断における主体性発揮を考察する際、主人公が養子であったことと、自分の血縁の両親の正体を知らなかったことは彼女の決断に大きく影響している。キャロル・シングリー (Carol Singley) は、アメリカ文学の感傷小説において、庇護を受けることでハッピーエンディングを迎える養子というプロトタイプが存在するのに対して、チャリティを、「基本的な生存と、より高次の自律性の探求の間を行き来する」キャラクターとして差異化する (Singley, 2011: 179)。換言すれば、養子である主人公が、自身の生存を懸け妥協するような選択と、他方で、自身の主体性発揮を目指すという両極で葛藤するのである。シングリーは、養子である若い女性主人公の「安全の探求」を、本作の主題の一つとして挙げている (Singley, 2011: 179)。養子にとっての「安全」とは、もちろん後見人に引き取られて生存することを指すはずであるが、チャリティの場合、ノース・ドーマーで養子として生活することは、疎外されながら生きていくことを意味する。なぜなら彼女は、マウンテンという被差別地域から引き取られてきた子供だからである。チャリティのマイ

ノリティ性を把握するには、物語の舞台となっているノース・ドーマーとマウンテンという二つのコミュニティについて検討する必要がある。マウンテンとは、ノース・ドーマーから15マイルほど登ったところにそびえる崖にある集落の呼び名である。彼女はマウンテンで生まれ、5歳のときにロイヤルに引き取られ、ノース・ドーマーで育てられた。非キリスト教的文化をもち、非文明的な生活様式を持つかに見えるマウンテンの住人は、ノース・ドーマーの住人にとって差別の対象とされるが、多少の交流は存在する¹。例えばマウンテンの住人が亡くなると、ノース・ドーマーから牧師が派遣されたり、チャリティの血縁に当たるリフ・ハイアット (Liff Hyatt) がノース・ドーマーに木材を提供したりと、限られた住人どうしの往来がある。しかしながらマウンテンが差別の対象であるのは、住人たちの司法と性規範からの逸脱によるところが大きい。ロイヤルがハーニーに説明するところによると、マウンテンはノース・ドーマーの郡区として管轄されているが、保安官や収税吏はおらず、「盗人や無法者の一団」が法を無視しながら暮らしているという (Wharton, 1917: 132)。そして、マウンテンの規範からの逸脱が最も強調されるのは、結婚制度、すなわち、彼らの性規範についてである。葬儀のために牧師がマウンテンへ呼ばれることがあるため、ロイヤルは、「マウンテンの人々はキリスト教的な葬儀を行っていると考えているだろうが、彼らの結婚式のために呼ばれたことはな」く、「彼らは単に野蛮人のように群れになって暮らしているだけなのだ」と話す (Wharton, 1917: 132)。このロイヤルの言葉から浮かび上がるのは、ノース・ドーマーの人々がマウンテンに抱く差別意識の根底にある、異なる性規範に対する軽蔑である。実際にマウンテンの性規範、結婚制度がどのようなものであったかについては第2章で詳述するが、明確な結婚制度が無いかに見えるマウンテンの性規範は、保守的なニューイングランドの村であるノース・ドーマーの住人にとって、野蛮で淫らなものと蔑むに十分な特色なので

ある。

このような被差別地域から養子としてもらわれてきたチャリティは、当然ながらノース・ドーマーにおいてマイノリティ性を帯びることとなる。この小説は、チャリティが都会から訪れたハーニーを初めて目撃する場面から始まるが、そこに描かれるのは、彼女の現状への不満と、ノース・ドーマーの閉塞感である。チャリティが彼を見て、すぐさまノース・ドーマーの人間ではないと判断したのは、彼が「都会の服」を身に纏い、「歯を見せながら」「無邪気に」笑っていたからである (Wharton, 1917: 99)。さらに彼女は、「休日の顔を浮かべた」ハーニーに委縮してしまい、鍵を探すふりまでして家の中に戻ってしまう (Wharton, 1917: 99)。ノース・ドーマーの人間ではないとすぐにわかる屈託のない都会人であるハーニーの描写に対して、チャリティのふるまいは、ノース・ドーマーという地方の住人である彼女自身の劣等感を示している。さらに、家の中に入り真っ先に鏡をのぞき込んだ彼女は、「アナベル・バルチ (Annabel Balch) のような青い目が欲しい」と願い、自分の「浅黒い顔」を見つめながら「私は全部が大嫌い！」とつぶやく (Wharton, 1917: 100)。チャリティが青い目を持たず、浅黒い肌であることから、白人女性の美の規範からの逸脱や、非白人の人種的コードが付与されていることがわかる²。

ノース・ドーマーにおいて、チャリティはマウンテン出身であることから、このような他者性を付与される。のちにロイヤルがハーニーに向かってマウンテンの特徴を説明するのを彼女は耳にはさむが、それまでの間彼女が理解しているのは、自分の出自が恥ずべきことだというだけである。チャリティは実際にはマウンテンで暮らしていた時のことは記憶がないにも関わらず、ミス・ハッチャード (Miss Hatchard) をはじめとするノース・ドーマーの人々から、マウンテン出身であることを強く意識させられている。ミス・ハッチャードとはロイヤルと同様に町の有力者で、ノース・ドーマーの保守的な規範性や閉鎖性を体

現する人物であり、チャリティの規範意識の形成や帰属意識の乏しさを生むのに大きな影響を与える人物である。ミス・ハッチャードは、チャリティが恥ずべき場所であるマウンテンからもらわれてきたのだから、「黙っているように」、そして「感謝するように」と「念押し」することで、彼女の自由を抑圧し、出自の卑しさを刷り込んできた (Wharton, 1917: 102)。このようにチャリティは周囲からは同胞とは認められず、つねに他者化されている。

さらに、ミス・ハッチャードの言葉がチャリティに単に感謝の念を強制するだけではなく、彼女に沈黙を強いていることは注目に値する。この沈黙の強制が、のちにチャリティの性と自立の問題を引き起こすからである。というのも、チャリティがマウンテンに来てから七、八年後、ロイヤルに性行為を強要されそうになるという出来事が起きた際、ここでもまたミス・ハッチャードは彼女に沈黙を強いたのである。チャリティはミス・ハッチャードに、彼のもとを離れたいと告げたが、ミス・ハッチャードは何が起きたのか勘付いたうえで、「あなたをマウンテンから連れてきてくれたのはロイヤルさんだということを、いつも忘れてはいけませんよ」と声を掛けるだけである (Wharton, 1917: 111)。ロイヤルの家庭内における養父の性暴力の危機を認識しながらも、チャリティを助けるどころか出自を引き合いに出し沈黙を強いるのである。チャリティはミス・ハッチャードが助けてくれないと悟ると「さらなる深い孤独の感覚」に襲われている (Wharton, 1917: 111)。つまり、マウンテン出身の養子としてノース・ドーマーにいる限り、常にチャリティはマージナルな存在として疎外されるのである。しかし、町で一番の権力者であるロイヤルと、非血縁ではありながらも、「家族」として繋がることにより、安全の獲得を辛うじて成し遂げている状態なのである。

2. ロマンティック・ラブからの逸脱

自身の出自が原因となりチャリティが抱える困難は、この小説のメインプロットでもあるハーニーとのロマンスに影を落とす要因となる。19世紀における養子を主人公とする物語や、女性ビルドゥングスromanに共通するハッピーエンディングをウォートンが避けることで、「ロマンティックではなくリアリスティックな」養子に関する物語を描いたと、シングリーは指摘している(Singley, 2011: 178)。彼女が論じるように、この小説は一見、異性愛ロマンスを軸とした物語の体をとるが、実際には主人公の恋愛は成就せず、ロマンスの相手とは別の異性と結婚する。ロマンスの失敗が誘惑小説というジャンルにおいて描かれる場合、概して主人公が妊娠してしまい、産褥死するというパターンが見受けられる。あるいは自然主義的な傾向が強い作品の場合には、恋に落ちた女性主人公は転落の一途をたどり、娼婦になるか身投げをするなどの悲劇的な結末が一つのパターンとして挙げられる³。したがって、主人公が養父と結婚することを選び、婚外交渉により別の男との間に身ごもった子を育てるという本作の結末は、いずれのパターンにもあてはまらないだろう。それでは、先に確認したような差別の対象となる出自は主人公のロマンスの失敗にどのように影響しているのだろうか。チャリティは、ハーニーとの恋愛を通じて自身の出自をより深く認識するようになる。彼は最終的にアナベル・バルチという、チャリティが永らく憧れていた女性を結婚相手に選ぶ。本章では、チャリティというキャラクターが備える特徴を検証することで浮かび上がる、ロマンティック・ラブからの逸脱性と、その不可能性を明らかにしたい。

この主人公のキャラクター造形は、家庭小説でも理想とされる当時の女性の規範からの逸脱性を示している。19世紀の女性に求められた資質は「真の女性礼賛」とされ、その資質とは、「敬虔さ」、「純真さ」、「家庭的であること」、「従順さ」

の4つである⁴。つまり、これら4つの規範から逸脱する女性は、結婚相手に相応しくないとみなされる。チャリティは、この観点から検証すると明らかに意図的にすべての規範から逸脱するよう造形されているのである。

まず従順さに関して、彼女は、養父ロイヤルに対してしばしば反抗的な態度をとる。例えば、一回目の求婚の際には彼の外見の老いを侮辱するような発言をするうえ(Wharton, 1917: 113)、二回目には彼を「傷つけてひるませるような言葉だけを考え」るなど、従順な女性とは言い難い(Wharton, 1917: 156)。彼女に家庭的な才があるかと言えば、そのような性質はあまり付与されていない。彼女が時折裁縫をしている様子は描かれるが、ロイヤルに雇わせたメイドのヴェレーナ(Verena)に料理などはほぼ任せているようである。特にハーニーと逢引きするようになってからは、ヴェレーナの作った夕飯を食べて眠る程度の時間しか家には滞在しておらず、彼と親密になるにつれて家庭的な領分からは逸脱してゆく。そのうえチャリティは、敬虔な性質を備えているわけでもない。もともと、彼女の父親が「娘をクリスチャンのように育ててくれ」と懇願したことがロイヤルの心を動かし、彼女は非キリスト教的な習俗を持つマウンテンからノース・ドーマーへと引き取られた(Wharton, 1917: 133)。したがって、彼女がノース・ドーマーで何らかのキリスト教的習慣などを多少なりとも身に付けていると予想できるが、彼女にとってキリスト教の教義などが精神的支柱となっているとは言い難い。独立記念日の翌日、彼女が一人でマウンテンへと向かう道中、「ゴスペル・テント」という場所で、若い男に神の下で罪を告白するよう勧められるが、彼女が「私は横になる場所があったらいいなと思っただけよ!」と強く言い返したので、その男に「罰当たりなことを言うものではありませんよ」とたしなめられる(Wharton, 1917: 180)。そして彼女は、キリスト教的文明をもたないマウンテンへと向かっていくのである。たとえ彼女がノース・ドーマーでキリスト教的教育を授けられたとして

も、懺悔することを拒み異教徒の地へと歩みを進める様子から、彼女の性質は敬虔さとはむしろ対極にあることが読み取れる。

彼女の恋愛や結婚に最も影響を与えられるのが「純真さ」、すなわち純潔を守っているかどうかであろう。もちろん、チャリティは婚前交渉の後妊娠してしまったので、その時点で貞節を失ったといえるが、ここで強調せねばならないのは彼女は最初から純真さを欠いたヒロインとして描かれていたわけではなく、むしろ、自身がマウンテンの出身ゆえにノース・ドーマーの住人たちの根強く抱く規範意識を彼女が内面化していたということである。彼女はハーニーと肉体関係を結んでしまった場合どうなるか自覚し恐れていた。彼がノース・ドーマーを去ろうとしていることに気が付いた夜、チャリティは彼の部屋のベランダに忍び込むが、決して彼には気付かれないようにする。というのも、ここで彼女は友人の姉ジュリア (Julia) を思い出すからである。この女性は、婚外交渉で妊娠し、ノース・ドーマーから最も近い都市ネットルトン (Nettleton) で中絶手術を受け、それ以降はネットルトンで娼婦として生活していることが明かされる。ジュリアの妹アリー (Ally) が、姉と内密に連絡を取っていることをひた隠しにする様子も描かれており、ノース・ドーマーにおいてジュリアの存在がいかにタブー視されているかがうかがえる。チャリティはハーニーのベランダで、もし彼の部屋に入れば何が起ころのか理解した。チャリティがここで想起するのはミス・ハッチャードがジュリアの件を黙殺していたことである (Wharton, 1917: 150)。ミス・ハッチャードが体现するこの地域の保守的で排他的な性質は、結婚前に妊娠した女を排除するものであった。これを思い出し、自身の貞操を極めて自律的に守ろうとしていたことも事実なのである。

しかし結果的には、チャリティはハーニーとのロマンスによって婚外交渉に及び妊娠してしまうが、彼はチャリティと結婚しないばかりか彼女を置いてノース・ドーマーを去ってしまう。つ

まり、結婚と再生産を目的とするロマンティック・ラブは、二人の間に成就しなかったのである。こうしたハーニーの姿勢を予言していたのは、ロイヤルだった。廃屋で逢瀬を重ねる二人の前に現れたロイヤルは、ハーニーに、彼女と結婚する意思などないことを言い当てると、はぐらかすハーニーと、何も言えずにいるチャリティを前に、彼女の母親の正体を暴露する。実は、イーグル郡 (Eagle County) の男たちはみな彼女の母親が誰か知っているという。彼女の母親メアリー (Mary) はネットルトンの出身だったが、マウンテンの男と結ばれ、そこで「野蛮人のように」暮らしていたという (Wharton, 1917: 203)。マウンテンで一夫一婦制の結婚制度が成立していないようであること、すなわち、乱交的コミュニティであることは既に明かされていた (実際、チャリティの母メアリーの死に際に、彼女の子供の数がマウンテンの住人にすら把握されていない様子が後に描かれる)。つまり、メアリーの性的放縦さは、ノース・ドーマーの男たちが共通して抱くイメージであり、それゆえ、どんな男もメアリーの娘を妻とするはずがないのである。このことは、チャリティにとっても未知の事実であり、ここで初めて彼女は、ノース・ドーマーにおいて自分の出自がどのような意味をもつのか、改めて認識させられる。つまり、マウンテンの血を引くことは、性的に逸脱した放縦さ、淫乱といった烙印を押されるため、彼女が妻として選ばれることはないかと悟るのである。したがってチャリティは、ノース・ドーマーにいる限り、一人の相手と恋に落ち、その相手と結婚し子を産み育てるというロマンティック・ラブの成就が困難なキャラクターとして造形されているのである。

3. 「家族」形成の決断——出産と結婚

最終的にチャリティは、ハーニーとの間に身ごもった子を出産し、ロイヤルと結婚することで、

子供を育てていく選択をする。二人は作中で、二度、「家族」になる。一度目は、ロイヤルがマウンテンから彼女を養子として受け入れ、親子になったとき、二度目は、ハーニーとの子を身籠った彼女がロイヤルの求婚を受け入れ、夫婦となったときである。二人の間に結ばれた家族関係は、どちらも血縁によっても、ロマンティックな情愛によっても結ばれていない。では、チャリティとロイヤルの結婚は、規範的な家族からどのように差異化され、何を意味する結びつきなのだろうか。まずは、「家族」の定義と、それが社会においてどのように機能するのか確認したい。竹村和子によれば、近代以降登場した産業資本主義は、公私の空間を隔離することで、私的なものである親族関係と公的な社会が相互補完的な関係となっていた。そこで、私的空間、つまり家庭は再生産の場として役割を担うことになった。そして近代家族は、「法によって認可された夫婦と、生物学によって裏書された血縁の子ども（たち）が生涯にわたって家族関係を持ち続ける」という、「血縁至上主義ファミリー」となった。したがって、子供の正しい認知が重要視され、それ以外の関係性は異端視されるようになったのである（竹村, 2012: 47）。つまり、養子をとる行為そのものが血縁至上主義の家族形成への抵抗と読むことができるのである⁵。

養子縁組という行為が、血縁至上主義の家族規範から逸脱するとき、作中で二度も描かれるこの家族形成の営みには、どのような意味が込められているのだろうか。まず、ロイヤルとチャリティの間に結ばれる非血縁の親子関係については、地域コミュニティにおける両者の孤独が根底にある。ロイヤル夫人の死後、ミス・ハッチャードはチャリティを寄宿学校へ進学させるよう提案したが、彼はそれを認めなかった。チャリティは養父がこの提案を受け入れなかったことに落ち込むが、彼が断わったのは彼女を失うことへの恐れであると理解していた。彼女が彼に対して「特別な愛情」や「感謝の気持ち」を抱いているわけではないと断り書きがあるものの、養父の「孤独」

に彼女は深い理解を示している。チャリティは彼の孤独の原因を、「ロイヤルが彼の周りの人々よりも優れている」ためであると見抜いている（Wharton, 1917: 108）。換言すれば、ロイヤルの孤独はノース・ドーマーの住人たちとの交流では解消されないことを意味する。これを裏付けるのは、彼がハーニーとの会話を楽しむ場面である。ロイヤルがハーニーとの交流を楽しむ理由として、「ルーシャス・ハーニーと同等の質を持つ人物と話すのはかなり久しぶりだった」と書かれていることから、ロイヤルが日頃から知的な会話をする相手に飢えていたとわかる（Wharton, 1917: 131）。つまりロイヤルの孤独の一因には周囲より相当に知的であるがゆえ、満足のゆくコミュニケーションを欠いていることがあげられる。一方、チャリティの孤独とは、第1章で述べたように、出自による差別を受けているためである。ロイヤルとチャリティは、ノース・ドーマーというコミュニティのなかで、知性のレベルが高すぎる、あるいは、卑しい（とみなされる）出自であるという正反対の理由ではあるが、疎外感や孤独を共有しているのである。

このような、チャリティの疎外と孤独感の経験は出産と結婚の意思決定にも影響している。彼女は、ジュリアがかつて通ったネトルトンの病院に中絶手術を受けに行くが、意思を翻し、出産の決意をする。ハーニーに別れを告げる手紙を投函した病院からの帰り道、彼女の心情は決意に満ちたものとして描かれる。チャリティは、「二度と自分自身を独りぼっちだと感じることはなく、「あらゆることが突然はっきりと、単純に見える」、自分がもはやハーニーの妻になることを思い描き苦しむこともなく、いまやこの子供の母親である」と実感するのである（Wharton, 1917: 212）。これは、ロイヤルから最後のプロポーズをされる前の出来事であるため、彼女は結婚よりも先に、すでに出産を決意している。さらに、出産するという決断は彼女にとって重荷になることはなく、彼女が幼少期から背負ってきた孤独を癒すものであった。つまり、養父との結婚とい

う庇護を受ける意味が前景化する家族形成以前に、彼女は出産という形で自分の家族をもつことを自ら決断していたのである。ロイヤルとの結婚の直後、彼から買い物代を貰ったチャリティは、ネトルトンの医師の元へ、診察料の担保として半ば強制的に取られたブローチを取り返しに向かう。このブローチは、ハーニーからプレゼントされたものである。チャリティは、これを「自分の赤ん坊のために」取り返すことにした。彼女はこのブローチを持っていることで、生まれてくる子の父親が「わからない」のではなく「ハーニーの子」であると証明できると考えたからである (Wharton, 1917: 242)。このチャリティの行動には、血縁の親が不明の状態のまま育てられた自身の経験が反映されているのは明らかである。チャリティの子も彼女と同様に養子となり、非血縁の家族の一員となるが、自分の子供の親を明らかにしようとするチャリティの意思に基いたきわめて主体的な、子供のアイデンティティの基盤を形成しようとする営みである。

チャリティの出産の決断と並び、彼女の主体性が最も問われるのが、ロイヤルとの結婚である。ロイヤルと結婚しハーニーとの子を育てるという結末は、表面上はロマンティック・ラブによって結ばれた家族と同じようにみえる核家族的な共同体を築くことになる。ロイヤルの一度目の求婚の際、彼女はロイヤルの性的欲望を強く拒絶したが、最後には結婚を受け入れることを選ぶ。この婚姻関係は、はたして、ロマンスの結果の結婚とはどのように異なるのだろうか。この二人の家族形成の特異性を考察する前に、婚姻関係がこの時代において、どのような性質を持つことを前提としていたのか確認しておこう。社会学者アンソニー・ギデنز (Anthony Giddens) は、「情欲的な愛」が「結婚のための必要かつ十分な基盤として認識されるようになった」のは近代以降のことであると指摘している。前近代においてほとんどの結婚とは「相互の性的な魅かれ合いに基づくのではなく、経済的状況に応じて交わされる契約」

であったという (Giddens, 1992: 37-8)⁶。ところが近代以降、ロマンティック・ラブの概念が個人の生に波及することで、結婚が恋愛を経ってから交わされるようになった。ロナルド・L・ハワード (R. L. Howard) もまた、近代における「ロマンティックな結婚の出現」について論じている。彼は、ロマンティックな結婚を「両人のエロティックな、あるいは感覚・心理的な情念の充足を目的とするという考えの上に立脚」する「内部志向的結婚」とした。この種の結婚では、個人の内面、「なかでも個人の愛情や愛着が最も重要な動機となる」とハワードは強調する (Howard, 1981: 232)。したがって近代以降の結婚は近代的自我の形成と相まって、情愛や性的な結びつきが前提となることが期待されたのであり、ロマンティック・ラブ・イデオロギーと相互補完的に恋愛と結婚が一つの線で結ばれたのである。

こうした背景を踏まえると、ロイヤルとチャリティの結婚の逸脱性が浮かび上がる。特にチャリティは、本来ハーニーとの結婚を夢見ていたのであるから、情愛を動機とする結婚を強く望んでいたといえる。しかし前章で確認したように、彼女はその夢を諦めざるを得ず、性的に惹かれてはいないロイヤルとの結婚を選んだ。この結婚の本質は、彼のプロポーズの言葉に表れているように思われる。マウンテンで実母の埋葬を終え、そこに留まろうとするチャリティを迎えにきたロイヤルは、帰路、再び結婚を申し込む。一連の出来事に疲弊した彼女は「自分自身の弱さへの恐れ」から身体を震わせる。ロイヤルは、彼女がいま求めているはずなのは、「家へ帰ることと面倒を見てもらうこと」だと話す (Wharton, 1917: 234)。彼女は妊娠しているため、生き延びることを最優先にすると、ロイヤルの主張は正しいだろう。仮にノース・ドーマーを一人で出たとしても、その未来は、ネトルトンで娼婦になったジュリアが予告している。ロイヤルは続けて、「私の歳になると、男は重要なこととそうではないことを見分けられるようになるんだ、それこそ、人生が私たちにもたらしてくれる唯一の良い変化だよ」と話し

かける (Wharton, 1917: 234)。この言葉が決定的に彼女を説得するのだが、彼の言う「重要なこととそうでないこと」とは何を指すのか。つまりロイヤルは、何を選択したのか。他の男との間に子を身籠った彼女との結婚を決断することは、すなわち家族の規範であるはずの父・母・子の関係からの逸脱を意味する。この結婚によって、チャリティは妻であり娘でもある存在となり、彼女の子は、彼の娘でもあり孫ともなるからである。しかし、この結婚がなければ、最初にロイヤルが養子としたチャリティも、その子供も、安全の保証もない。だからこそ、恋愛の結果としてではなく、生存のための苦肉の策として二人は結婚を選んだのである。

さらに、ロイヤルが自身の変化の理由に老いを挙げていることから、彼の性のありかたの変容を読み取ることもできないだろうか。ネトルトンで結婚式を挙げた晩、ホテルの部屋に一人で先に戻ったチャリティは、ベッドの中で「私は何をしてしまったのかしら？」と恐怖に震えながら足音が近づいてくるのを聞いている (Wharton, 1917: 240)。これは結婚初夜の場面でもあり、彼女がひどく震えているのは、彼と結婚してしまった以上、性行為を強要されるのではないかと怖れていると解釈できる。ところが彼は、おそらくチャリティが怯えていることを知ったうえで、彼女のベッドに入ることもなく、服も脱がずに椅子で休んでいた。ロイヤルが椅子で寝る、つまり夫婦となった後も性行為を要求しないことは、彼女に「言葉にできないほどの安心」を与えている (Wharton, 1917: 240)。こうすることで「彼と一緒にいれば彼女は安全だということを示す」のだとすれば、彼の行為は、彼女の性を脅かさないという意志表明として解釈できるだろう。ロイヤルの与える安全は再び強調される。一夜が明け、家に向かう道すがら、二人の目が合うとチャリティは「今まで見たことのない何か」を彼の瞳の中に見つけ、この眼差しは彼女に恥ずかしさを感じさせたが、同時に「安心」も与えた (Wharton, 1917: 243)。ここにも、二人の関係の変容を読み

込みことが可能だろう。性的な結びつきと再生産が期待されるはずの夫婦関係からも、家族の規範からも逸脱した形でありながらも、「家族」という一つの規範性を獲得することで、チャリティは自身の出自ノース・ドーマーという集落で、安全を獲得して暮らすことができる。あくまでもチャリティの決断によって形成されたこの家族像は、主人公が主体的に獲得しえた生のありかたではないだろうか。

注

- 1 マウンテンを一概に「未開の地」や「非文明地帯」というように解釈するのは早計である。ノース・ドーマーの人物たちは、マウンテンを「野蛮人」などと称し、彼らの非文明性を強調する。確かにそのような一面もある一方、マウンテンは、「全く典型的ではない」と建築家のハーニーに言わしめるような独特な建築様式をもつなど、単に非文明的なのではなく、異文化を持つ共同体であることが示唆されている (Wharton, 1917: 137)。
- 2 このようなチャリティの特徴から、本作品における人種の問題は、エリザベス・アモンズ (Elizabeth Ammons, 1995)、“Edith Wharton and the Issue of Race” に詳しい。
- 3 前者の誘惑小説の例としては、Hannah Webster Foster, *The Coquette, or The History of Eliza Wharton* (1797)、後者の例としては、Stephen Crane, *Maggie: A Girl of the Streets* (1893) などが例に挙げられる。
- 4 「真の女性礼賛」(“The Cult of True Womanhood”)の理念に関しては Barbara Welter, “The Cult of True Womanhood” (1966) を参照。
- 5 ドゥルシラ・コーネル (Drucilla Cornell) も同様に、「国家強制的な異性愛、核家族、かつ一夫一婦制からなる」家族の特権性を養子縁組の問題から再考している (Cornell, 2005: 21)。
- 6 ギデンスは、このように性を動機とする結婚が前近代には稀であったことを指摘しているが、貴族階級においてのみ「性的な自由」が認められていたと論じている (Giddens, 1992: 39)。

Works Cited

- Ammons, Elizabeth. 1995. “Edith Wharton and the Issue of Race.” *The Cambridge Companion to Edith Wharton*, edited by Millicent Bell, Cambridge UP, pp. 68-86.
- Cornell, Drucilla. 2005. “Adoption and Its Progeny: Rethinking Family Law, Gender, and Sexual Difference.” *Adoption Matters: Philosophical and Feminist Essays*, edited by Sally Haslanger and Charlotte Witt, Cornell UP.
- Giddens, Anthony. 1992. *The Transformation of Intimacy*:

- Sexuality, Love, and Eroticism in Modern Societies*. Polity.
- Howard, Ronald L. 1981. *A Social History of American Family Sociology*, edited by John Mogey, Greenwood Press.
- Singley, Carol J. 2011. *Adopting America: Childhood, Kinship, and National Identity in Literature*. Oxford UP.
- Wershoven, Carol. 1986. "The Divided Conflict in Edith Wharton's *Summer*." *Edith Wharton*, edited by Harold Bloom, Chelsea House Publishers, pp. 117-22.
- Welter, Barbara. 1966. "The Cult of True Womanhood." *American Quarterly*, vol. 18, no. 2, part 1, pp. 151-74.
- Wharton, Edith. 2001. *Ethan Frome & Summer*. Modern Library.
- Wolff, Cynthia Griffin. 1987. "Cold Ethan and 'Hot Ethan.'" *College Literature*, Vol. 14, No. 3, pp. 230-45.
- 竹村和子, 2012. 『文学力の挑戦——ファミリー・欲望・テロリズム』 研究社.

